

# 『王子と乞食』論

## On *The Prince and the Pauper*

齋 孝 則  
Takanori SAI

*The Prince and the Pauper* consists of thirty-three chapters and Conclusion. In the novel the stories of the prince and the stories of the pauper are mostly depicted independently and in contrast. It is natural that the prince and the pauper should have very different experiences. Yet, the prince/king never fails to behave as a prince/king; the pauper unconsciously comes to behave as a king. They are very much like with each other in that both of them show mercy. This essay maintains that Mark Twain blesses through this novel the mercy of the prince/king and the pauper.

### 1

Linda A. Morrisによれば、『王子と乞食』は「何より若い聴衆を対象としたものだった」(379)。確かに簡潔な文章と明快な筋立てを持ち、健全な道徳性を備えていることを考えれば、この作品は若い読者を対象として書かれたとみなすことが出来る。ではこの小説は、若い読者を対象としてどのような意図で書かれたのだろうか。その根本的な意図は王の慈悲を嘉することにある、というのが筆者の考えである。作者が巻頭に『ヴェニス商人』のポーシャの台詞（「慈悲の本質は云々」）を掲げていることはその傍証である。

作品の、あるいは作者の意図を知る上で筆者が目にしたのは、この小説が王子と乞食の話であることは題名からして余りに明らかであるが、王子の話と乞食の話どのように扱われているだろうかという点である。平等に五分五分の扱いになっているのか、そうでないのか。一緒に扱われているのか、別々に扱われているのか。対照的に描かれているのか、両者はどう関わりあうのか。第1章は「王子と乞食の誕生」と名付けられている。その冒頭の第1段落には、「一人の男の子がキャンティという名の貧しい家に生まれた、望まれての誕生ではなかったが。」と書かれ、続く第2段落には、「同じ日にもう一人の男の子がチューダーという名の豊かな家に生まれた、こちらは望まれての誕生だった。」と書かれている(1)。すなわち第1章においては、王子と乞食は一緒に扱われつつも、片や貧しく望まれずに生まれ、片や豊かに望まれて生まれるなど、対照的に描かれている。但し、対照的とは言え、必ずしも

両者の相違点のみが強調されているわけではなく、「同じ日にもう一人の男の子が……生まれた」等々、共通点もまた指摘されている。

## 2

第2章で先にまず「トムの幼少期」が描かれた後、第3章で王子と乞食は一緒に扱われる。早くも乞食のトム・キャンティが王子エドワード・チューダーに出会うのである。この出会いの場面は頗る重要である。それはここで王子の慈悲が示されるとともに、もともとそっくりだった王子と乞食が戯れに衣服を交換したばかりに、その後の長い混乱が生じるからである。ある朝、空腹で起き上がったトムはあてもなく歩くうちに宮殿前まで来てしまい、長らく抱いてきた「王子様に会いたい」との思いから顔を門の格子に押し当てていたところ、兵士の一人が彼を乱暴にひっ捕まえて放り投げ、「行儀を弁えろ」と叱り飛ばす。たまたまそれを見かけた王子は言う、「そちはその気の毒な子供に、なにゆえさような振る舞いをするのか。我が父たる王のか弱き僕に、なにゆえさような振る舞いをするのか。門を開け、子供を中に入れよ」(11)。この小説における王子の最初の言葉は、かような威厳ある慈悲の言葉なのである。それに続くエドワード・チューダーのトムに対する言葉も、慈悲に満ちている。「そちは疲れていて腹も空かせているようだ。酷い扱いを受けたのであろう。一緒に来るがいい」(11)。王子はすぐトムに食事をさせるが、その際も気詰まりなく食べられるようお付きの者らを下がらせるなど「王子らしい」気遣いを示す。やがて二人は王子のふとしたひと言に端を発して互いの衣服を交換するが、大きな鏡の前に並ぶと「二人は衣服を交換したようには見えなかった」(16)。つまり、お互いが余りにそっくりであることに二人は気付くのだが、この時王子はトムの手の傷に気が付き、それが先ほど宮殿の門の所で兵士の乱暴によって出来たものであることを知る。怒った王子はトムの襤褸衣（ぼろぎ）を着ていることを忘れて門の所へ出て行ってしまったため、先ほど問題を起こした、自分とそっくりのトムと間違われてしまう。一方、トムの方も同じことで立派な王子の衣服を身につけているため、皆から自分とそっくりの王子と間違われる。こうして二人がそっくりなために人違いをされることで大きな混沌が生じて行く。この混沌は最後から三番目の第32章「戴冠式」で、二人の正体が証明されるまで続く。このように人違いが元で起きた混沌が収束して秩序が戻るのは喜劇の常道である。裏を返せば、この第3章における二人がそっくりなために生じる人違いは、これからしばらく混沌が展開することをあらかじめ予告しており、それゆえ重要なのである。

かくてトムにそっくりな王子がトムの襤褸着を着ていたため、王子はトムと間違われ、辱められながら宮殿の門から外へ追い払われる。このあとしばらく、王子と乞食は別々に扱われる。初めのうちはどちらかと言うと乞食のトムが描かれることが多いが、第4章では王子

が描かれる。「王子の苦難が始まる」というタイトルを持つ第4章では、王子が、キリスト教会に暮す孤児たちから酷い乱暴をされ、文字通り苦難が始まる。だが、それを振り返る王子の言葉は王子に相応しい洞察に満ちた言葉である。「余が王になったら、彼らには食料や住いだけでなく、書物の教えも与えねばならぬ。腹が満たされても頭脳や心が空っぽでは、何の価値もない云々」(21)。すなわち、王子は乞食扱いされる苦難の中にあっても、いささかも変わらず王子であり続けるのである。作者はかようにして王子には王子に相応しい言動をさせ続ける。しかしそのためかえって苦難は続き、王子はやがて乞食のトムの子の父親ジョン・キャンティに捕まってしまう。父親は王子を息子のトムと思いついでおり、王子がいくら「自分はイギリスの王子だ」と言っても、こいつは気が違った、くらいにしか考えない。

第5章から第9章までは、専らヘンリー8世を描く第8章を除き、トムの宮殿でのしくじりと宮殿生活への適応とが扱われる。続く第10章は主に王子とトム・キャンティ一家、特にトムの母の様子が描かれる。王子は自分のことを息子だと思っているトムの母に向かって言う、「神に誓って、余はそちの心を悲しませるに忍びない。されどもことに余はそちの顔を未だかつて見たことがない」(58)。この言葉を聞いてトムの母は息子は頭がおかしくなったと思いきや泣き出してしまふ。一方、王子をトムと信じて疑わないトムの父が王子に、今日の乞食稼業のもらいを見せろと言うと、王子は「下らぬことを言って余を怒らすな。繰り返して言うが、余は王の子である」と言う。これを聞いて怒ったトムの父が大きな手で王子をはたき、叩かれた王子がよろめくとトムの母は王子を受け止め、身を呈して王子を乱打から守る。すると今度は王子が身を振りほどき、「余のためにそなたを酷い目にあわせることは出来ぬ。この豚どものしたい放題は余一人が受ければよい」と言い、事実その通りになる。王子はトムの母の勇敢で犠牲の大きな庇いだてに心を動かされ、「高貴にして王子らしい言葉で感謝を伝える」(60)。ここでも王子は王子らしい言動を貫き、慈悲の心を忘れていない。

但し、この第10章の終わりの数行には王子の別の一面が描かれる。それは王子のトムに対する思いである。「王子は直ぐにもう一つのことも悟った。すなわち、あの偽物のウェールズ公が自分の代わりにロンドン市から祝宴のもてなしを受けようとしているという事実である。あの乞食小僧のトム・キャンティはこの途方もない好機を周到に利用して、王子の座を奪おうとしている」、そう王子は即断する。そして中世の非情な王子の姿を示す。

それなら、取るべき道はただ一つ、ロンドン市庁舎へ赴き、我が正体を知らしめ、べてん師を告発するのだ。そしてトムには懺悔のための然るべき時間を与えた上で、反逆罪における今日の法と慣例に従い、首を吊り、腸を断ち、四つ裂きにしようと心に決めた。(67)

もちろんトム・キャンティが「王子の座を奪おうとしている」ことはないが、王子の追い込

まれた状況を考えれば、そのような誤解も無理からぬことである。

### 3

さて、第3章の終わりで王子が宮殿の門から叩き出されたあと、王子エドワード・チューダーと乞食トム・キャンティはしばらく別々に扱われるが、第11章では扱われ方が少し異なる。ここでは同じ市庁舎に王子と乞食がいて、トム、王子、トムという具合に両者が交互に扱われるのだ。上の引用にある通り、囚われの身でなくなった王子は身の上を明かすため直ちにロンドン市庁舎へ赴くことを決心していた。第11章「ロンドン市庁舎にて」の冒頭には、トムが皇太子としてお召し船に乗ってテムズ川を下る様子が描かれている。やがて船を降りた彼はロンドン市庁舎に到着する。祝宴が始まり、トムがその様子を楽しんでいた正にその時、「襤褸衣姿なれどまことの幼きウェールズ公は、自らの権利と自らに加えられた不当な仕打ちを主張し、ペてん師を告発し、ロンドン市庁舎の門からの入場を要求していた」(70)。王子と乞食両者の立場の違いが、ロンドン市庁舎の内と外で印象的に描かれる場面である。王子は例によって王子らしい堂々たる言葉で自らの主張を繰り返すが、いつものように群衆の嘲りにあう。だが、この時、王子の味方を名乗るマイルズ・ヘンドンなる男が登場し、王子を窮地から救出して走り去る。片や市庁舎では突如、ラッパが鳴り響き、深い静寂があり、宮殿からの使者の言葉に、大勢の群衆が立って耳を傾ける。その最後の言葉が厳かに発せられる、「王がお隠れになられた」(72)。群衆は一斉に首を垂れ、深い沈黙があって、やや時間が過ぎる。それから皆は一斉に跪いてトムに向かって手を差し伸べ、叫ぶ、「国王陛下、万歳」。初めのうち、ぼうっとした目をしていたトムの顔に「突然」ある決意の表情が浮かび、彼は宣言する、「では、今日この日より、王の法は慈悲の法となろう。血の法とは決別する。立て、そして行け。塔へ行き、王がノーフォーク伯は死なせぬと布告した旨、伝えるのだ」(73)。

ここまで、読者は第4章と第10章において、真の王子の王子らしい威厳と慈悲に満ちた言動を目撃している。育児院の子供たちの乱暴にあっても、トム・キャンティの母の心遣いにあっても、彼の言葉は威厳を帯び、慈悲に溢れていた。一方、トム・キャンティについては、夕食における無作法をはじめ、周囲のものの胸を痛めるようなことばかり描かれてきた。それが、この第11章において突然「王の法は慈悲の法となろう」という宣言を発する。このことにより、これまで対照的に描かれてきた王子と乞食に、慈悲という共通点が生まれたと言える。

### 4

続く第12章と第13章では王子、第14章と第15章では乞食、という具合に両者は再び別々

に扱われる。第11章で王の死が伝えられたのは、王子とヘンドンが去った後だった。第12章、王子は市中の何千もの声からそれを聞き、激しい悲しみと孤独感に襲われる。そしてまた、「エドワード6世国王陛下、万歳」という遠雷のような叫び声が聞こえ、王としての実感を覚える。二人はロンドンにおけるヘンドンの下宿に来たところで、王を息子のトムと思い込んで追って来たジョン・キャンティに遭遇するが、ヘンドンが追い返す。ひとつの下宿に来て王は徹頭徹尾王らしく振る舞うが、ヘンドンもあるがままそれを受け入れる。食事の際も同席など元より許されない。けれども、王は言う、「そちは余を怪我と恥辱から守り、ことによると生命、そして王冠さえ守ってくれた。かかる功績は然るべき恩賞を以て報いられよう。望みを申してみよ。我が王権の及ぶところのものならば、すなわちそちのものとなろう」。まことに王にふさわしい堂々たる宣言である。ちなみにこの時ヘンドンは言葉を尽くして、自分と世継ぎが王の御前で椅子にかける栄誉を願い出て、受け入れられる。

第14章と第15章で扱われるのはトムの国王らしい振る舞いである。第14章で登場するハンフリー・マーロウは王子の学友であり、王子が勉強で間違えると身代わりとなって鞭打たれる打たれ役 (whipping boy) だが、王子が王となった今、もし王が勉強を止めてしまうと自分の打たれ役としての仕事がなくなり、親のいない自分と自分の妹たちの生活の糧がなくなってしまうことを切々と訴える。同情したトムは「まことに王にふさわしい寛容な心を示して」彼の不安を静める。マーロウの肩を剣の平で軽く叩いて、トムは言う。

「立て、イングランド王室御用達の打たれ役ハンフリー・マーロウ、悲しみは無用である。余は再び書を手に取り云々」(105)

第11章に引続きここでもまた、トムは以前とは違う慈悲溢れる、国王に相応しい振る舞いを見せるのである。さらに続く第15章「王としてのトム」では、慈悲だけではなく個性的な方法でトムは国王らしい振る舞いを見せる。Cliffsによると、「トムの機転と生来の知性、人間性と品位が描かれる。特に好奇心と気晴らしから民衆の性質を聞いたり、囚人を連れて来させたりした時に、それが現れる」。トムは「王国の平和と威厳を損う罪を犯して」処刑されようとしている男、女、及び少女とあとを付いていく群衆を目にする。3名の運命を案じた彼は、「一瞬、自分が王の偽りの影に過ぎぬことすら忘れて、思わず「あの者らをここへ連れて来い」と命じてしまう。トムは男が毒殺を行ったため、絞首刑でなく釜茹でにされることを聞き、「この法律を改めるむね命令を発するように」と指示して釜茹での刑を廃止する。続けてトムは男の取り調べを自ら行い、「人ひとりがかくも下らぬ軽率な証拠で絞首刑に処せられるとは腹立たしいことだ」と言って、王の意思として男を釈放する(115)。

続けてトムは女と少女を呼び出し、両名が悪魔に魂を売った廉で絞首刑になったことを知

る。その証拠に女は魔法の力で嵐を起こし、辺り一帯が被害に遭ったと聞いたトムは「では女も嵐の被害に遭ったのか」と問う。集まっていた老人数人はこの問いの賢さに気付く。続けて「自分自身がかような被害に遭う力を手に入れたとは、高い買い物をしたものだ云々」とトムが言うと、女の罪人は泣くのを止め、トムの言葉に興味と期待を抱く。無実の罪を着せられた女はトムから嵐を起こせば少女共々許してやる、と言われるが、自分にはそんな力はないと繰り返し主張する。するとトムは、「仮に余の母がこの者と同じ立場にあり魔法の力を持っていたら、余の命を救うため直ちに嵐を呼び起こし辺り一帯に被害を遭わせるはずだ」との論理により、女は魔法の力は持たぬと断じ、二人を自由の身にする(120)。この展開は、トムが彼なりの知恵により王としての役割を果たし始めたことを示している。かように王としてのトムの姿には彼なりの独自性が伺える一方、王としての役割を果たそうとしている点については不在のエドワードと何も変わるところはない。このように第12章から第15章にかけては王子と乞食は全く異なる状況にありながら、結果的に王としての共通点が浮き彫りになっている。

## 5

さて、このあと、作品後半の大半を占める第17章から第29章までは、すべて王子(王)を扱う。この間、王は逃げたり囚われたり連続である。酷い目にあうこともあれば、自分は国王だという言葉が子供が素直に信じてくれることもある。しかし、片時も王としての自覚を忘れることはない。第23章には自分につきまとう窃盗団の一味から窃盗の罪をなすりつけられる場面がある。この時、マイルズ・ヘンドンは王に言う、「お考え下さい。陛下の作られた法律はみな、陛下の権威の現れにございます。その権威の源であられる陛下が法律に抵抗し、臣民にはそれに従えと仰せになられますか」すると。王は答える、「そちのいう通りだ。分かった。英国の王が臣民に従うよう求めるものは何にあれ、英国の王が臣民の地位にある間は自ら従うところを見せよう」。この遣り取りを通して、王は濡れ衣とは言え、臣民と同じく法廷での調べに服すことを受け入れる。

この後、さらなる試練に見舞われた挙句、王はヘンドンと共に投獄される(第27章)。「社会的見地から言えば、この小説の大半はこの中心的、山場的な章に向かって進んできた。イングランドの真の王がいまや自身の牢獄におり、普通の囚人同様の扱いを受けている」とCliffsは書く。しかし、イングランドの真の王の真の困難は「自身の牢獄におり、普通の囚人同様の扱いを受けている」ことではない。間も無くあのトムが新王として即位式に臨むらしいことを知って愕然とする真の王を、獄中において二人の女性が慰めてくれたのだが、翌朝には姿が見えない。獄吏の呼び出しで出た中庭の中央には二人の女性が柱に繋がれている。王は鞭を受けるのかと思い「おかしい、まことにおかしい、この広い王国の権力の源である

余があの方たちを守ってやれぬとは」と独りごつ。やがて女性たちの足元には薪が積み上げられ火が放たれる。そこへ女性たちの娘が二人入ってきて一緒に死なせてくれと泣き叫ぶ。イングランドの真の王の真の困難はここにある。王は目をそむけ、言う、「余があの方に刹那に見たものは決して我が脳裏を去らずに留まろう。余は日がな一日それを見続け、夜は夜もすがら、死する時まで夢に見よう」(214)。王は洗礼派の信仰を持ったばかりに火炙りにされた気の毒な女性たちのことを、自らに言い聞かせ、脳裏に刻み付け、後に娘たちに慈悲を施す(第34章)。

## 6

Cliffs は、互いの衣服と立場を交替して入れ替わったこの王子と乞食の物語は、両者が本来の立場を取り戻す第32章において「おそらく真のクライマックスを迎える」と指摘する(64)。……二人が冗談に互いの衣服を交換したことで生じた混沌が、互いの真の正体が明らかになることによって収束し、調和が取り戻されるのはまぎれもなく第32章である。ゆえに、この章においてこの喜劇がクライマックスを迎えるということは言える。

けれども、この喜劇的作品の真のクライマックスは、むしろ直前の第31章において認められる。また、その兆しはさらに一つ前の第30章に現れているので、まずは第30章を段落ごとに詳しく見ていく。第一段落は以下の通りである。

Whilst the true king wandered about the land, poorly clad, poorly fed, cuffed and derided by tramps one while, herding with thieves and murderers in a jail another, and called idiot and impostor by all impartially, the mock King Tom Canty enjoyed a quite different experience. (下線、筆者)

まことの英国国王が見る影もない乞食の姿で、空腹をかかえて国内を放浪し、いたるところであざけられ、虐待され、あるときは、盗人や人殺しといっしょに牢へつなわれ、またあるときは、無頼漢、無籍者の中に捕らえられて、なんぎや苦労のありったけをなめている間に、にせの国王トム・カンティは、それとはまるで反対の経験を味わっていた(村岡(254-55))。

村岡訳ではなぜか「英国国王」となっているが、原作には「英国」に当たる語はなく、二人の本質的な違いは二つの単純な形容詞(trueとmock)で対照的に描かれている。さらに片やthe true kingと書かれ、片やthe mock King Tom Cantyと書かれ、二人の「国王」の現在の境遇の差が、普通名詞と固有名詞の違いに反映している。第11章を最後に別々に描いてきた二人を、作者はこの第30章に至り、短い段落の中とはいえ、久しぶりにあい並んで描く

のである。二人の本質的な違いと現在の境遇の差を読者に思い起こさせることは、間も無く両者を本来の位置に戻すためにも必要な準備だったはずだ。

上の引用に引き続き第2段落で作者は、トム・キャンティが味わっていた経験、言い換えれば「まことの国王」とは「まるで反対の経験」を書く。「心配も消え、不安もなくなり、恥かしいことも、気まずいことも、日一日と減っていき、動作も様子もすっかり落ちつき、まことに申分のない王様ができてしまった」。無論、これはトム・キャンティの王様らしさが板についてきたということだが、直前の「にせの国王トム・カンティ」という言葉を踏まえると、無条件に共感できる内容ではない。続く第3から第6までの4つの段落もすべてトム・キャンティの王様らしさが板についてきたことの記述である。4つの段落の冒頭が‘He ordered my lady …,’ ‘He came to enjoy …,’ ‘He even learned to enjoy …,’ ‘He enjoyed his …’ と判で押したような同じ文の形を繰り返しているのは偶然ではない(224-25)。作者はこの繰り返しにより、トムが王様らしさを身につけ、それを楽しんでいることを、強調しているのである。作者も4つのうちの3つ目の段落の最後ではトムの楽しみに付き合うかのごとく、トム・キャンティの様子を弄んで書く、「ああ、その前身はオーファル小路の乞食小僧であったトム・カンティよ！ これはまた、なんとという幸福な、運命の転変であったことだろう！」(村岡256)。

だが、間も無く作者の戯れも終わる。短い第30章も3分の2に差し掛かった第7段落で、突然、文章の調子が変わる。作者は一転して真面目な口調で問う、「トムはかつてあれほどまでに自分を親切に遇してくれた、気の毒な年若い正統な王子のことを思って、一度も心を乱すことはなかったのだろうか？ 云々」(226)。「いや、そうではない……」と作者は一旦、答える。最初は「ずいぶん心配だった」。しかし、やがて「つとめて思い出さぬように」なってしまった。続く第8段落も、「オーファル小路に残した母親や姉たちのこともそのとおりで、いつか心の中からぬけだしてしまった」(村岡257)。という一行で始まる。「はじめの間こそ」「どうかしてあいたいと思った」が、「やがて彼らの記憶も心の中から消えた」(村岡257)。作者はトム・キャンティの忘恩や忘却を、咎めるともなく淡々と描いている。

この第30章の最終第9段落には第1段落同様、この作品の主人公両名の様子が略述される。

At midnight of the 19<sup>th</sup> of February, Tom Canty was sinking to sleep in his rich bed in the palace, ...  
At that same hour, Edward, the true king, hungry and thirsty, worn with travel, and clothed in rags and shreds, ... (227)

ここでは、具体的な日付とともに片や「トム・キャンティ」と呼ばれ、片や「まことの王

たるエドワード」と呼ばれ、短い第30章の冒頭と末尾で両者の呼称が周到に変化している。混沌から調和へ向けて事態が動き出すことが暗示されているのである。

Cliffsによれば「特に第31章はトム・キャンティが本来持っている善良な性質を強調する。彼は自分を取り巻く豊かな富を享受してきたが、母の姿を見たこととその母を残忍にも拒絶したことが元で、また乞食に戻りたいと強く願うようになる。彼は新しく手に入れた栄光や財産を放り出して、家族の元に戻り、もう一度ただのトム・キャンティに戻ればと本気で願う。彼の国王という地位も、母やきょうだいたちの愛に比べれば、空疎なのだ」(64)。

第31章は若い新王の即位を祝う晴れやかな叙述で始まる。「翌朝、トム・キャンティが目を覚ました時、あたりの空気は、雷鳴のようなどよめきで、満ちあふれていました」(大久保434)。やがて「トム」はテムズ川を下り、王としての認証パレードの出発点であるロンドン塔に到着する。「トム・キャンティが壮麗に着飾った姿でまたがったのは、意気揚々と闊歩する軍馬」だった(大久保435)。華やかな認証パレードの様子が縷々描かれる中、トム・キャンティがつぶやく、「そして、こんな素晴らしいもの、こんな素敵なのが、みんなオレを歓迎してくれるためにあるんだ。——このオレをだぜ!」。さて、第31章に入り、ここまで彼のことを「トム」ないし「トム・キャンティ」と書いてきた作者は、ここで呼び方を変える、「ニセの王さまの頬は、興奮にパッと赤くなりました」(大久保441)。そしてロンドン市民にさらなる心付けをたっぷりまこうとしたその時、トムは自分をじっと見つめていた母親に気づく。彼は手の平を外に向けつつ手を目の前にかざす、驚いた時のいつもの仕草をする。それを見た母親は群衆をかき分けてトムの元に駆け寄り、彼の脚を抱いて「ああ、いとしい我が子よ」と叫ぶ。が、たちどころに近衛兵が母親を乱暴に引き離す。この気の毒な出来事が起きた正にその時、トム・キャンティの唇からは「女よ、余はそちを知らぬぞ」という言葉が漏れていた(村岡264)。興味深いことにこの劇的な場面において話し言葉はトムの母の言葉だけで、トムの無慚な言葉を含め大半は以下のように地の文で書かれている。「けれども母親があのような扱いを受けるのを見て、彼の心は打ちのめされた。その姿が群衆に呑み込まれて見えなくなる中、母親は最後にもうひと息子をみようと振り向いたが、その彼女は酷く傷つき、憔悴しているように見えた。彼は恥ずかしさで一杯になり、自尊心は消え失せ、盗んだ王位は色褪せたものとなった。様々な栄光は価値を失い、朽ち果てたボロ着よろしく我が身から抜け落ちていった」(233)。実は主人公とその母の身に大変なことが起きているのだが、それがパレードの喧騒の中で掻き消されたかのごとくである。

喧騒の中のトムの激しい落胆はこの作品の最も印象的な場面の一つと言える。主人公のまなざしが自分自身に向いていく。この第31章の冒頭で目を覚ましてから母親を見つけるまでの間、トム・キャンティのまなざしは外に向いている。パレードの最中、遠目に

オーファル小路の仲間を見つけた時、トムは「気づいてくれないかな！（Oh, if they could only recognize him now!）」(230) と強く思う。この時、彼のまなざしはもちろん外に向いている。そして母親を見つける時ももちろん同じだ。「彼は母親に気づいた！（he recognized his mother!）」(233)。しかし、母親が自分から引き剥がされる姿を見、かつ自ら母を否認してしまった後、彼のまなざしはもはや外には向かない。「何も見えず、何も聞こえない（He neither saw nor heard.）」(233)。「後悔が彼の心を苛んでいた。彼は言った、「神よ、この囚われの境遇より我を救い出し給え」（Remorse was eating his heart out. He said, 'Would God I were free of my captivity!）」(234)。壮麗な隊列の中にも、トムには母の顔とあのうちひしがれた表情しか見えない。民衆からの祝福の言葉が地を震わすほど鳴り響いても、「もっと近くで、すなわち彼自身の胸の中で、呵責に苦しむ良心の中で、「女よ、余はそちを知らぬぞ！」というあの恥ずかしい声が繰り返し聞こえてそれを掻き消す」のである。こうして、トムは王位への興味を失っていく。

第32章において王子と乞食はそれぞれの本来の地位を取り戻し、喜劇としての『王子と乞食』は大団円を迎える。本来の地位を取り戻すまでは王子と乞食がともに王の威厳を持って発言し、本来の地位を取り戻してからは王と臣下としての発言に入れ替わる様は、誠に小気味好い。

第33章「王としてのエドワード」の終わりで、王はトム・キャンティに言う、「余はこの過去2～3週間の話を聞いている。そちのことを大変嬉しく思う。そちはこの王国を正統かつ、王にもまごう寛容と慈悲の心を以て治めてくれた。（中略）余の声が聞こえる者はみな心得よ。今日この日より、キリスト病院の庇護と王の保護を受けて住まう者たちには、日々の糧はもとより心と精神にも糧を与えよう。この少年はそこに住まい、終生、病院の栄えある監督官の主席を務めさせる云々」。このエピソードもまた、この二人が示した王の慈悲を嘉するものと言えよう。

\*

\*

\*

この『王子と乞食』という小説はそのタイトルにある通り、王子と乞食を中心に話が展開する。縷々見てきた通り、王子の話と乞食の話は、1) 平等に五分五分の扱いになっているかと言えば、なっていない。章の数で言うと、王子の話は17あるが、乞食の話は10であり、王子の話の方が多めである（この作品は全部で33ないし34の章から成るが、王子が扱われるのが4, 10, 12, 13, 17～29の計17の章、乞食が扱われるのが2, 5, 6, 7, 9, 14～16, 30～31の計10の章、両者ともが扱われるのが1, 3, 11, 32, 33, 34の計6つの章、その他が1章である）。

これはおそらく、王子の方がより大きな苦難に見舞われたことの表れであろう。2) 一緒に扱われているのか、別々に扱われているのか、と言え、王子の話と乞食の話が一緒に扱われているのが6つの章であるのに対し、別々に扱われているのは27の章であり、多くは別々に扱われていると言える。これは、王子と乞食が立場を変えて全く対照的な社会階級に入ってしまったことの表れであろう。3) 王子の話と乞食の話は対照的に描かれているのか、と言え、確かにそう言えないこともない。王子と乞食は全く対照的な社会階級に入ってしまった以上、対照的な描かれ方にならざるを得ないだろう。特に過酷な環境に放り込まれた王子が乞食による陰謀を疑う時、両者の話ははっきりと対照的になる。また、正直一途な王子と機転のきく乞食との個性の差もあって両者は対照的に描かれていることがままある。しかしながら、筆者が最も注目したのは、むしろ王子の話と乞食の話の類似点である。二人にはその個性の差もさることながら、それを越えて共通する性向がある。それは両者とも自分を見つめ直すことが出来、それゆえ常に王子ないし王として臣民に慈悲を施す覚悟があり、実際施すことである。王子の場合、キリスト教会に暮らす孤児たちの乱暴に悔し涙を流した折でさえ、自分が王になったら慈悲を教えなくては、という風に自分を見つめ直すことが出来る(第4章)。また、ジョン・キャンティの家に連れて行かれた時も、彼の妻を守るために王子は彼からの暴力を身を呈して受け、その妻の心遣いに感謝して、早く休むよう慈悲の心を示すことが出来る(第10章)。さらに、洗礼派の信仰を持ったばかりに火炙りにされた気の毒な女性たちのことを、自らに言い聞かせ、脳裏に刻み付け、王位に復した後、その娘たちに慈悲を施す(第27章、第34章)。一方、乞食のトムも、ロンドン市庁舎において自分が王位に就いたことを知った時、決意の表情を浮かべ、宣言する、「では、今日この日より、王の法は慈悲の法となろう云々」(第11章)。また、もし自分が勉強を止めてしまうと打たれ役としての仕事がなくなるハンフリー・マーロウに対して、「立て、イングランド王室御用達の打たれ役ハンフリー・マーロウ、悲しみは無用である」と言って慈悲を示す(第14章)。さらに、無実の罪を着せられた囚人たちを自ら取り調べ、その罪を晴らしてやることで慈悲を示す(第15章)。いずれの王子の話も乞食の話も、本もの、偽ものの差こそあれ、王位にある者が慈悲を施す話と言うことが出来る。これを要するに、トウエインが『王子と乞食』で描こうとした根本的な意図は王の慈悲を嘉することにある、ということが出来る。

## 註

本論におけるマーク・トウエインの原著からの引用は、断りがない限り Puffin Classics から執筆者本人が和訳したものである。

**引用文献**

Mark Twain, *The Prince and the Pauper*, Puffin Classics, 1994

Cliffs notes on Twain's *The Prince and the Pauper* by L. David Allen & James L. Roberts, 1991

王子と乞食 マーク・トウェーン作 村岡花子訳 岩波文庫 2016年

王子と乞食 マーク・トウェイン作 大久保博訳 角川書店 2003年

**参考文献**

*A Companion to Mark Twain*, edited by Peter Messent and Louis J. Budd, Wiley Blackwell, 2015

Mark Twain, *The Prince and the Pauper*, Puffin Classics, 1994

Cliffs notes on Twain's *The Prince and the Pauper* by L. David Allen & James L. Roberts, 1991

王子と乞食 マーク・トウェーン作 村岡花子訳 岩波文庫 2016年

王子と乞食 マーク・トウェイン作 大久保博訳 角川書店 2003年